

### 岩崎秀雄 “Culturing <Paper>cut”

(シアノバクテリア、ゲルライト培地、生物学論文、紙、フラスコ、2013-)

池から採取したシアノバクテリアが、切り絵を配した培地上で培養 (culture) され、ゆっくりと成長・運動しながら複雑なパターンを描く。切り絵の素材は、バクテリアの動的な時間的パターン形成 (体内時計や形態形成) に関する、作家自身が著した実在の生物学論文 (paper) の一部だ (表: Umetani et al. 2013; 裏: Asai et al., 2009)。生物学者にとって、論文は「世界をどのように認識したのか」を表現するメディアにはかならない。その論文を、以下の三つのルールに従って切り刻むことで異化している

- i) 客観性を旨とする科学論文には、実際には強度の主観的見解、主体的観察の過程が刻印されている。子供の頃、「科学のレポートでは、できるだけ主観的な表現は排して、たとえば一人称も使わないほうがいい」という先生に出会ったことがある。それが壮大な嘘っぴちであることを知ったのはだいぶあとのことだ。この作品では、そのかつての先生が検閲するかのように研究者の能動的行為を示す部分や一人称的な記述を切り取っていく。そうするとテキストの部分は思いのほか穴だらけになるのだが、バクテリアがそこからワサワサ生えてくるようになっていく。ここには示していないが、切り取られた部分は集められ、いわばegoisticな部分やemotionalな部分もまたまとめて作品にしている。
- ii) 生物学の論文では、図・グラフ (視覚表現) は重要な位置を占めている。極論すれば、多くの論文の本体や核は図やグラフであり、テキストはその注釈であるとすら考えられる。視覚芸術文化の歴史と現状を考える時、自らを芸術家・デザイナーとは認識していない研究者たちが育んできた学術的表現様式として論文・教科書の図・グラフを意識することは、文化論・美学・表現論において重要な意味を持つ (が、それほど認識される機会は少ない)。そこで、ここでは図やグラフの意匠を積極的に残しながら切り刻むようにしている。
- iii) 生物学的文脈とは必ずしも整合的とは限らない、作者にとってvividに感じられる不定形かつ抽象的な切り絵の意匠を、下書きなしに即興 (ただし非常に時間のかかる即興) で切る、自由度の高い部分。これは、1989年ころから独自に開拓してきた表現であり、metamorphorestシリーズとして展開しているものを援用している (<http://metaphorest.net/residents/currentmembers/hideoiwasaki/38>)。

こうした要素を持つ切り絵をオートクレーブとオープンでホイル焼きしたものを、ゲルライトを含む培地に載せ、シアノバクテリアを上述のように植菌し、展示期間中培養し続けるのである。このようにして、ここでは科学的表象としての図、工芸的もしくはファインアートの造形としての切り絵、ジェネラティブなバクテリアのパターンの三者の意匠と情報が、共存しながら絡み合う。

※本シリーズは、オープンスペース2013 (NTT InterCommunication Center, ICC, 2013-2014)、マテリアライジング展 (東京藝術大学陳列館, 2014)、Culturing <Paper>cut展 (Wuensch画廊, リンツ, オーストリア, 2014) などで展示された。

動画: <https://www.youtube.com/watch?v=GJ2GBwAV5R8>

岩崎秀雄 Hideo Iwasaki 表現者 / 生命科学研究者

1971年生。metaPhorest主宰、早稲田大学理工学術院教授。科学および芸術の一筋縄ではいかない界面・関係性に興味を持ち、生命をめぐる科学・思想・芸術に関わる表現・研究のプラットフォームmetaPhorestを2007年より運営している。著書に『<生命>とは何だろうか: 表現する生物学, 思考する芸術』(講談社2013)、主な作品にaPrayer (人工細胞の慰霊, 茨城県北芸術祭2016)、Culturing <Paper>cut (ICCなど2013)、Biogenic Timestamp (アルスエレクトロニカセンター, ICC, 2013-)、metamorphorestシリーズ (オランダペーパービエンナーレ2010, ハバナビエンナーレ2009ほか) など。